

畜産大パニック阻止学習会のご案内

日時 2008年7月26日(土) 午後1時30分～4時30分

会場 新宿家庭クラブ会館 (JR 新宿駅南口徒歩8)

渋谷区代々木 3-20-6 TEL 03-3370-6322 案内図参照

テーマ

- 畜産・酪農生産者からの報告
- 「穀物先物市場への投機禁止は可能だ！」
講師：今宮謙二先生 (中央大学名誉教授
「投機マネー」等著書多数、国際金融と通貨のスペシャリスト)
- 「超多収性飼料用稲こそ畜産大パニック阻止の切り札」
講師：信岡誠治先生 (東京農業大学畜産マネジメント研究室、農学博士)

畜産大パニック阻止学習と討論の集い呼びかけ文

■牛乳・鶏卵が量販店の店頭から消える！

「猛暑になると夕方には牛乳が店頭から消える恐れもある。」

(中央酪農会議前田事務 局長、東京新聞'08・6・12)

「鶏卵 1 kgを生産するのに30～50円の赤字が出る！」

(日本鶏卵生産者協会調べ)

「今年出荷した(和牛) 13頭は、1頭10万円以上の赤字を出し続けている。」

(宮崎県都城市の和牛生産者、日本農業新聞'08・6・12)

■福田内閣の緊急対策は、飼料暴騰分の限定補填と、生産者乳価の1キロ30銭引き上げ、鶏卵補填基準価格の6円引き上げ等に留まり、抜本策を打ち出せず、『畜産物の生産コスト上昇分を小売価格に転嫁させて乗り切る』('08・6・12政府の緊急追加対策決定、6・13日本農業新聞)という内容です。しかも限定補填の中身は無利子の貸付に過ぎません。販売価格に転嫁できない生産者は一体どうなるのでしょうか？！

⇒ 家畜は生きているから、えさを断つことなど断じて出来ない！！

■給与所得が1998年以来10年連続で前年を下回り続けている消費者の大多数はガソリン代、光熱費と食料品の相次ぐ大幅値上げで家計は火の車！！

⇒ 農水省が先ず飼料代の暴騰分を全額補填することが畜産大パニックへの拡散を防ぐ第一歩なのです！！

⇒ 財源は5千億円程度とされ、米軍への思いやり予算 2,300 億円や1機 133億の F2 戦闘機を 77 機導入中等の予算支出の現実からして捻出できないことはありません

⇔ 『一国の安全保障の大前提は基本食料の自給にある。』これは世界の鉄則です。従ってEUに習って水田減反政策を直ちに放棄してミニマムアクセス米の輸入もストップさせることが不可欠となります。

⇒ さらに、穀物先物市場への投機ファンドの投機を禁止させる実効策を実行できるよう日本はEUや途上国と協調して行動すべきです。

⇒ その上で超多収性飼料米の本格的作付を全面的にバックアップする実効策を打ち出すことが確実な抜本対策となるのです。

→ 減反水田 100 万 ha に MA 米相当分の主食用米と超多収性飼料米を作付し、その半分の面積で超多収性飼料米を作付けできれば、飼料用稲粃 500 万 t 以上、粗飼料用稲藁 500 万 t 以上が確実に生産可能とされています。

* この施策で決定的に重要なのが「畜産堆肥で栽培した飼料米を家畜に給餌する活動を助成する」耕畜連携水田活用対策助成事業」の全蓄種での完全実施です（現在は乳牛と肉牛だけに限定）。

⇒ 耕畜連携により超多収性米を生産すれば稲粃と稲藁がそれぞれ 10 アール当 1 トンずつ確実に生産できることが東京農業大学畜産マネジメント研究室や各地の耕畜連携栽培で実証されています。

■減反水田の全面活用により米の完全自給と飼料自給率の大幅な向上が間違いなく実現できるのです！！（☆都市部の団塊世代による農作業支援も重要と考えられます。）

■穀物の先物市場への投機が国際的に禁止され、日本の水田の全面活用による主食米の完全自給及び飼料用稲粃と稲藁、他の遊休農地での飼料用作物を合わせて 1,080 万トンの飼料穀物と粗飼料の生産が可能となります。それらの実行が穀物相場を確実に沈静化させるファクターとなるのです！！

呼びかけ人（7 / 1 現在、敬称略、50 音順）

浅井民雄（有機農産物普及・堆肥化推進協会副理事長）、井口信治（東京福祉環境会議理事長）、伊藤和夫（鶏卵肉情報センター専務取締役）、上原公子（前国立市長）、榎谷雅文（獣医師）、海老沢恵子（元東都生協常勤理事）、甲斐真澄（NPO 法人由木の里理事）、金子美登（全国有機農業推進協議会理事長）、清水鳩子（主婦連合会参与）、辰濃和男（前日本エッセイストクラブ理事長・元朝日新聞論説委員）、中塚敏春（日本販売農協連合会専務理事）、蓮尾隆子（家庭栄養研究会副会長）、土方彰子（有機農産物普及・堆肥化推進協会理事）、平田迪子（ワーカーズ・コープ“旬”代表）、松村敏子（元コープとうきょう理事）、若狭良治（自然エネルギー研究センター取締役・元コープ低公害車開発代表取締役）、◎生産者団体：青森ときわ村養鶏農業協同組合石沢直士専務理事、畜産農民全国協議会森島倫生会長、千葉県長生地域畜産振興協議会中村種良会長、農民運動全国連合会食品分析センター石黒昌孝所長、以上 20 氏

問い合わせ先：遠藤和生 042-676-5363

飼料米が畜産・大パニックを防ぐ！シンポジウム の報告

食の安全や環境保全に熱心な19氏が中心になって呼びかけた標記学習会が2008年7月26日に東京都内で開催されました。

冒頭、前国立市長の上原公子さんが「この学習会は飼料の度重なる記録的な暴騰により廃業が続出している畜産・酪農生産者の苦悩を正確に理解し、事態の正しい解決に向け、生・消が協同できる行動を追求する為に開催する。」と挨拶されました。

先ず全国養鶏生産者会議の石澤会長から「『鶏卵は物価の優等生はもう終わりにして』とのキャンペーンを有楽町で実施し、消費者に理解を呼びかけた。大手の養鶏商社からも同感との声が上がっている。青森県でも今年度、飼料米を200ha作付している。多収性飼料米の増産を大いに期待するが、今後は減反水田での作付で米粉との戦いが予想される」などの報告がされました。

次いで畜産農民全国協議会の森島会長から「既に投資した農家は止めたくても止められない。自殺者が出ている。養豚では生産頭数を増やすにも借金がかさむ、このような学習会は次に繋がる。」との報告がされました。

酪農生産者では、千葉県長生地域畜産振興協議会の中村会長から「1986年のプラザ合意以後、自給飼料主体の酪農は採算割れする事態となった。生産者乳価が若干上がったが、小売店によっては成分無調整牛乳が不足し、加工乳のみ陳列されているところも出てきている。この現状を放置しておくとも大パニックになる。」との報告がされました。

日本鶏卵生産者協会の菊地常務からは「飼料価格は、昨年3万/tが5.5万/tに上昇し、10月にさらに上昇する。上昇分を全額補填するとほぼ4,000億円の財源が必要となる。飼料米は2年前から稲作農家と連携して国内生産を追求してきた。今年全国で1600haで作付され、耕畜連携による循環型地域農業の推進に貢献してきた。」との報告がされました。

生産者団体からの報告を受け、全国消費者団体連絡会の蓮尾隆子運営委員は、「消費者は、生産者の実情を理解すると行動する。生消が協同して畜産大パニックを未然に防ぐ運動を盛り上げたい。かつて第二次石油危機時での飼料代大暴騰時に生産者の価格引き下げ運動を消費者が支援した経験がある。今は国産を消費者が強く選択する時代、生産者がSOSを発信すれば、消費者は黙ってはいない、行動する。」旨報告しました。

東京農業大学畜産マネジメント研究室の信岡誠治先生が「超多収性飼料米こそ畜産大パニック阻止の切り札」と題して講演しました。「超多収性米の代表品種"靱ロマン"は昨年、慣行栽培で10a収1,016kgを達成した。今年鶏糞発酵堆肥を10a当4t投入し、殺虫・殺菌農薬不使用、除草剤1回散布だけで収量増を追求している。4年前から飼料米の超多収品種の本格研究を開始し、農水省に協力を要請したが門前払いされた。その姿勢は今も同じで飼料米の種子の増殖にも関与していない。

タイ米の品種「タカナリ」は蛋白含量10%で10a収1,275kg(靱)、玄米でも1,023kgを達成している。稲の実が1t獲れると稲藁も1t獲れるので、合わせて10a収2tとなり、飼料自給率向上への大きな貢献となる。現下の飼料高では両方で10a当10万を超える収入となる。*超多収品種の特性を確実に引き出す施肥のポイントは窒素分10a当28kg投入にあり、発酵堆肥の10a当3t以上の投入が最も好ましい。超多収飼料米栽培を普及していく上でこの施肥の基本が主食米の生産者には受け入れられないのが問題である。主食米の生産者は食味優先の栽培慣習を簡単には捨てきれないので超多収飼料米のローコスト肥培管理技術を稲作生産者に正確に理解して頂く努力が超多収飼料米

を普及して行く上で重要となる。」

次いで「穀物先物市場への投機禁止は可能だ！」のテーマで今宮謙二先生が講演されました。

「世界の三重苦—景気後退・金融混乱・物価高騰—をもたらした犯人は投機マネーだ。投機マネーが世界を大混乱させた出来事は3回ある。1回目が1929年の世界大恐慌、2回目は1974～75年にかけてのスタグフレーション(G7サミット第1回が'75年に開催された)、今回は3回目で巨額なリスクに対応できない市場原理至上主義の矛盾を露呈した。サブプライム危機がそのあらわれで企業破綻・金融の弱体化・市場混乱・モラル低下をもたらした。その背景には世界的低金利による過剰マネーと多様な金融商品の存在があり、「金融危機でも投機マネーが縮小せず」という新しい特徴が出現した。その結果投機マネーが金融市場から商品市場へ進出して、USコーンの価格が実需ベース価格のほぼ2倍になっている('08通商白書)といった事態が頻繁に起こっている。投機マネーを規制する実効策は投機助長の融資規制、投機利益の課税、市場の透明化、タックスヘイブン規制、トービン税、穀物・原油などの金融商品化規制、為替管理強化を国際協力で実施すれば効果が現出する。借金依存で儲け追求むき出しの市場参入という投機資金の決定的もろさと社会不安の激化が世界中で投機マネー反対の市民世論を高揚させている。そのうねりが投機規制を実施させる最大の根拠となる。1932年の大恐慌直後に国民の怒りを引き出して政府に「ニューディール政策」を採用させた米国ペコラ委員会の教訓を活かし、既に仏、独の政府が動き出し、ベルギーでは投機規正法が可決され、英国も傾いていてEU全体に波及しつつある。日本でも、畜産大パニック阻止の呼びかけ文のように生産者と消費者が一体となって投機規制を要求する国民運動が政府を動かす原動力となる。」という趣旨のご講演で私たちの運動に大きな確信を与えてくれました。

全体討論では市場原理至上主義の矛盾を制御するルールを確立する事が食糧への投機を禁止する基本である事を今宮先生が指摘されました。又下山保首都圏コープ事業連合初代理事長は飼料米の生産拡大中心に取り組みれば生協や消費者団体からの支持は広がるが生消協同で農水交渉を実施するなら要請事項の整理が必要となる旨指摘されました。

さらに清水鳩子主婦連合会参与は食糧自給率向上は大部分の消費者が賛同するテーマで、その立場に立った生産者の実力行使を消費者は応援する。畜産大パニック阻止に向け、消費者団体に向けた切り札を鮮明にした資料など情報提供が必要となる。上原公子さんは畜産パニックになった原因を正確に分析すると飼料自給率向上の緊急性に行き着く。米国の食糧政策への依存度を早急に低下させる政策転換が不可欠となる。

そのために飼料米生産拡大への正当な予算措置を要求し、消費者が支持できるデータの積み上げを急ぐ必要がある旨結論的な発言をされました。

同時に蓮尾隆子さんも農水省から飼料米政策を正確に聞き出すべきとの発言で時間超過となり閉会しました。